

トポスにおける発達

第 10 回

—砂場という謎—

無 藤 隆

重層的なトポス

幼稚園の庭をトポスと見なすと、そこで重要な焦点になるものがいわゆる固定遊具である。ブランコや滑り台であるが、その中でも砂場は特別な意義を子どもたちにとって持っているようである。どの園でも、砂場は子どもがよく使う場所だし、また、各々の年代によって使い方が異なり発展しながら、繰り返し使われるところであるからである。おそらく、その素材である砂・土・水などと、そのような素材に関わる動きと、またそこに持ち込めるごっこ的テーマとが、遊びに変化をもたらしている。また、複数の子どもが遊ぶ場合の独自の特徴もある。本稿では、これまでの議論のいわば応用問題として、砂場を小さなトポスとして分析することで何が見えてくるかを考えたい。

こういった遊具はそれ自体がおもちゃであるのだが、それ以上に、庭や保育室といった場所を二重化した重層的なトポスを作り出す。回りから切り離さ

れた空間があり、その中で新たな活動がなされ空間的な変容が起こる。同時に、囲む大きな空間との出入りがあり、交渉が生じる。さらに細かく言えば、その小さな場の中はさらに子どもの活動により区切られ、小さななわばりのようなところで子どもは遊びを展開する。このように特に砂場の場合には少なくとも三重の層をなしたトポスが形成される。一つ特徴的なことはその層が互いにかなり明確に区切られながら、その間の人や物（道具が水）の行き来が極めて容易であり、かつまた内外の活動を見聞きできることにある。同じ入れ子構造でも、他の固定遊具とは異なり、むしろ、保育室内のごっこ遊びコーナーとか、積み木遊びのコーナー（そういうものがあれば）に似ている。だが、それ以上に、開放的な区切りになっている。

その上で、もちろん、砂を置いてある空間として独自の遊びが展開される。おそらく幼児はその砂場の持つ特性を最大限に活用し、きめ細かな応対を行

うように年齢と共に変わっていくに違いない。その変容の姿から、トポスにおける発達の一つの典型的な様子を見ることが出来る（同じ砂場といっても、砂がどれほどサラサラしているか、粘土質を含んでいるかで、保水性が変わるので、遊びもかなり変わる。ここでは主に私が観察している東京周辺の幼稚園を念頭に置いている）。

ごっことして

特に三歳児くらいが砂場に座り込み、カップに砂を入れては回りにひっくり返してかぶせ、「ケーキ」らしきものを作っている様子が見られる。低年齢の場合は、カップを使って、「ケーキ」を作ったりして、ママゴトの一部になったり、小さなシャベルで小山を作ったり、穴を掘ったりするようである。これが可能になる一つの条件は、砂が多少湿り気と保水性を持ち、固めればしばらくはそのままの形を保つから出来ることである。それをさらにいい

れば砂はほぐれてバラバラになり、下に落としたり、回りにばらまいたり出来る。また同時に、その材料である砂が砂場の至る所にあり、いくらでも使えるからでもあろう。座り込んだところ自体が砂であり、手に届くところも砂である。遊びの材料が全面をしめている空間に入り込み、遊びを展開するのである。

シャベルで穴を掘ったり山を作ったりも、初めの内は深さ・高さが小さいし、傾斜も緩やかである。それが徐々に傾斜がきつく、深く・高くなっていく。砂に手で力を加えて固めたり、手でパンパンとならしたりすることを覚えるからである。シャベルを使う際に砂に深く差し込み、そこで力を込めて下の方の固まった砂をほじくり出すようになる。

ここで行われる見立てやごっこは多くの場合に幼いものに留まる。ケーキなどに見立ててもそれ以上にごっこを展開するためには、他の道具（ママゴト用具や積み木など）が必要であるし、ケーキを持ち

上げて食べようとする と崩れてしまい、実はママゴトにならない。他の子どもと共にごっこ遊びを展開する場としては砂場は向いていないことが分かる。

にもかかわらず、見立てを幼い子どもが行うのは、砂という全面に広がる素材に対して、子どもが持っている構成的関わりの唯一の手段であるからかもしれない。子どもの操れる手と小さな道具という範囲では、砂を大規模に動かすことはできない。また、ほとんど平たく存在している砂に対して慣れない内は取っつきようがない。どう関わってよいか分



からない。コップに土を入れてひっくり返すときれいな形になることはそれ自体が驚きだし、砂という漠然とした素材への有効な関わりとして感じられる。穴や山も同様にささやかな関わりの中から、有意味な事柄を生み出す作業である。通念とは逆に、ただひたすら掘ったり積み重ねたり以前に、ささやかな作業と見立てが生まれるようである。そこに砂という特定の関わりを要求しない、そしてすぐにはどうかかかわってよいか分からない素材に対する子どもの構成的関係が現れる。

山・水・泥

深く掘り続け、山をひたすら高くするという砂への持続的な動作的関わりが現れることで砂への関わりが本格化する。そこでの動きを見ると、ごっこ的な見立て自体は現れておらず、結果として何かが出来たときにせいぜい出てくるようである。固まった砂を掘り出す抵抗感と、その後にはぐれていく意外

性、さらにその砂を山に重ねてさらに高くしていくことで見えてくるものがまさに「山」に見えることがその関わりの面白さの中心であるように思える。山という見立ては、砂の積み重ねで自然に出来上がる円錐形を見える通りに呼んだものである。見立てとも言えないほどのものであり、全体として砂に関わる動き自体が中心になって、遊びを継続させている。

遊びが大きく変わるのが水が加わることによってである。砂の種類や、水道がそばにあるか、砂の深さなどによって変わるものの、水を加えることで、池のように水が貯まり、また砂が泥状になる。乾いた砂が濡れて黒くなり、さらに泥になり、泥水になる変化自体が興味深い。泥の持つ触感が砂とまた異なった独自の肌に粘り着くようであることも見逃せない。それと共に、泥の特質ははねさせたり、なすりつけたり、と砂とは異なる動きを生み出す。

水が貯まり、徐々に水が染み込んで泥から再び砂

に戻ることや、既に作った山や穴に水を入れることで崩れる様子や、水を次々に加えていって、大きな池のようにすることは、やはり新たな見える様子と動きとを可能にしている。

水道は大概、砂場自体のそばではあるが外にあるから、これも水道から水を運ぶという活動を引き起こし、水道と砂場という二つの場の結びつきを作ることになる。水は絶えず砂場の外から持ち込まれ、砂の底にと消えていく。

水もまた、きれいな混じりけのない水が砂と混じり、泥水となり、いかにも濁った状態になる。砂と水の合成から新たなものがそこに出現しているのである。

本来、砂と土や泥は構成要素としては小さな石が集まったものである。石の種類と細かさにより、保水性が異なり、粘着度が変わってくる。土に水をまぜても、泥状になり、ドロコ遊びが出来る。そこに全身を漬けて遊ぶことを可能にするように、砂場

よりもっと広く深いドロコの場合もある。砂場では、子どもたちの関わりにより泥が生まれ、またそれがすぐに消えていくという変化とが特徴的である。

土木作業としての砂場

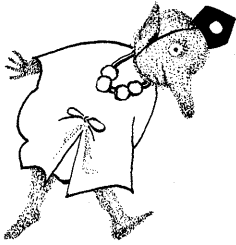
砂場に水を持ち込む頃、「トンネル」を掘ったり、水を入れて「ダム」を作ったりし始める。それが進むと、小さなシャベルではなく、スコップなども使って、かなり大きく深い穴や広い池などを作り出す。底が深ければ、子どもの腰あたりまで掘り進むことも珍しくない。

そこにミニカーや電車を走らせたり、何かのごっこ遊びの舞台にすることもあるが、遊びの中心は砂場全体を作り替え、自分の思うがままの土木的作業の舞台とすることにあるように思える。砂場という場が、平らに砂があり、それをいじるところではなく、むしろ立体的な工作の場であり、子どもがそこ

に入り込んで、立体作品を作り出すようなのである。

しかし、その作品は安定した完成したものにはならず、水が砂に染み込んでいくために、絶えず水を補給しない限りは現状を保てない。子どもはじっと見ていることは出来ず、絶えず水を注ぎ入れたり、作り替えたりすることが必要になる。ダイナミックな変容の中で遊ぶことが砂場への関わりとなる。

子どもが自らの力でまたその意志や恣意で、その場を作り替えることが可能である場は多くない。ほ



とんどの固定遊具はその構造を子どもが変えることは出来ない。積み木のような遊びだと砂場と同様に子どもが作っていくのだが、砂場ほど、時間の経過と共に絶えず変貌を迫られるものではない。構築した砂のまとまり（山や穴やダムや）はもういものであり、水が染み込みやすいものであるから、思いがけない変化を勝手に示したり、子どもの関わりで予測され難いような偶然的なことを入れ込みやすくもある。大人が長い時間を掛けて、工事したり環境の改善や変更を行ったりするのを、砂場は小さな規模で、子どもにも可能な形で、実現してみせている。砂場が回りと切り離された独自の場であり、しかもその変更がある形で子どもに許されていることが重要な意味を持つのである。

自然の基礎物

土木作業として砂場の遊びが広がっていくことは、おそらく子どもにとって、砂場を越えての環境

への関わりとの結びつきで、砂場遊びが感じ取られてきたことなのではあるまいか。砂・土・水・また山・穴・川・池などは、自然がもっている最も基本的な環境的特徴の一つである。その上に素材として、砂・土や水は、古来から火や空気と並んで自然を構成する基本要素とされてきた。近代以降の自然科学の中でそのような見方は否定されたにせよ、小さな子どもにとって、また体を通して関わる活動においては大人にあっても、自然の基底にあるものであることは変わることはないだろう。非生命としての自然の基本となるはずである。

その点では、砂場の遊びが自然の最も基底にあるものとの関わりを可能にする意義を持つことになる。しかし、重要なことは単に自然の基本的構成物が砂・土や水であり、それが砂場にあるからということではない。そこでの子どもとの関わりが、それらの自然物が人に対して持つはずの根底的な関係を示すものかどうかである。

逆に、もし幼児が行う関わりがその根底的な関係の一端を示すはずだと考えてみてはどうだろうか。砂を掘り、積み上げること。砂を固め、ほぐすこと。砂に水を加え、泥にして土とのつながりを作り出すこと。これらが砂場にある子どもの基本的な動きに違いない。そうだとすれば、その動きがまた人が自然物の基底としての砂・土・水に関わる際の関係を示すものでもあるはずである。

砂や土は地面としてものを支え、水を受け止めて貯め吸収しました（泉のような形で）返すものである。そこでさらに生命体を養い、生命体の死の後の身体を受け止めるところでもある。砂場は生命体との関連を示すことはないが、それ以前の地面と水との関係をよく表しているし、また土が素材として細かい砂のようなものが固まったものとして理解しやすい場でもある。砂場は子どもが自然物に関わる一つの窓口であり、その場での活動を行うことで、自然のある根底部分に触れるところなのだと言ってよい

だろう。

小さなトポスの意味

砂場とは、そのささやかだが、子どもには結構広い空間を砂で埋め尽くし、水を入れ、穴を掘り、砂を積み重ねるのを可能にする場である。回りは通例、細い棒が地面に置かれることでその外の庭から仕切られ、したがって、出入りは四方から自由で、かつ、声を掛け、見聞きすることも勝手に出来る。

子どもが一人で遊ぶとしても、その数名が持続的に並行することが可能である。その数名の遊びが次第に近づいて、山やトンネルやダムを作る際に共同するようになることも容易に出来る。子どもが外から見て興味を持っては、そばに来て、砂をいじり始め、その内一緒になることもしばしば見られる。水を取りにしょっちゅう水道まで行くことも、出入りと新たな発展を容易にする。

砂場が持つこの半ば開かれた構造的特質から、園

の庭での重要な焦点になりやすい。また、そこでの遊びが持続的なものであるだけに、一定の人間関係が形成される機会になる。その関係はものに関わることの深さと連動しての独自の性質を帯びるものとなる。いわば身体に食い込んだとも言えるような関係である。

園が持つ環境は、部屋の中でも庭にあっても、このようないくつかの独特の特徴を持った小トポスが焦点となつて、全体としての構造化がなされる。小さな子ども力からは、このような小さなトポスとそこでの自らの関わりを通しての変容の体験がふさわしい範囲である。子どもは、その小さなトポスにあって安定して自らの力を発揮し、環境を作り替える試みを行う。この小トポスが、同時に、回りに開かれることにより、子どもの関わりも変化し、人間関係も発展するのである。

(お茶の水女子大学)